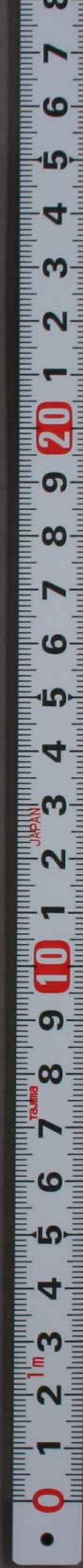


東海道名所圖會
一

ル 3
3759
1



ル 3
號 3759
卷 1

昭和42年12月12日寄
和田大作氏贈

入
金
子

和
田
大
作

此の神一天皇御宇十年に安き成
川ありお好ましくししと東海
乃ちまゝにふめておのりお守む
死守十年のたふと命をもちて
阿比方れりよあかきあしと
葉の一天皇御宇十年の秋

凡例

一 東海道ハ系師より多く先多江戸小到は都く十州小豆其
驛路と標せし名所古跡神社佛院と圖會と後驛と圓圖ハ
その題し初程ハ其下小署也

一 海道ハ神社を延喜云神名帳小載ハ選んて記ハ郷里ホ多
生土神あり多くハ勸修の神祠ハ是ハ除く然もともハ度ハ
到して攝ん多載る寺院も亦あれハ准し古刹と撰んて記し末ハ
の濱寺道場ハ致し除限ありとて又省くハ略畿内名所
圖會ハ例ハ倣也

一 東海道より五里七里入る地も亦名神名刹ハ是ハ取
尾州津島天王二州鳳来寺遠加秋葉山相州大仏寺江嶋
鎌倉等あり然ハ是ハ准と
一 渾く方位と示と多ハ前位ハ循ハ多某の東ハ里某の西ハ町ハ

一 ありと證し或ハ左の方右の方と系師より東國ハ外ハ旅者の
左右あり

一 引書ハ古本流布の紀ハ和歌代ハの撰集詩賦ハ名家の文集ハ
引據とん軍談ハ其要と撮んで記し神廟梵刹の由縁ハ社人
寺僧の記せるハ勲ハ又村翁野史の記ハ是ハ亦載る事あり

一 世ハ鴨長明道之記同海道記といふ二書あり 是ハ本校ハ予ハ
長明ハ兼之五年十月十日鎌倉小下向ハ將軍實朝公ハ掲
法善堂ハ懐舊の和奇ハ詠ハ事東艦ハ是ハ殿后ハ年と廢
建保四年六月八日長秋二十四日ハ率ハ此事方丈記訓說ハ神ハ

一 源親ハ和奇ハ其本集ハ入るハ光行ハ記するハ社家ハ捨棄ハ其
源親ハ和奇ハ其本集ハ入るハ光行ハ記するハ社家ハ捨棄ハ其
源親ハ和奇ハ其本集ハ入るハ光行ハ記するハ社家ハ捨棄ハ其

有澄大師傳藏
友皇子傳

滋賀花園

志賀津

梵釋廢寺

唐崎一ツ松

猿屋

神門

八王子宮

神祖御宮

真葛原

興成宮

石占井

妙見祠

歡喜石

鼠祠

走井大師堂

八柳

輕子宮

西教寺

浮御堂

比良

菊濱

栗津野

兼平墳

同輝影

志賀山嶽

黒主祠

明智光秀城趾

日吉山王神社之宮

二宮

客人宮

三宮

神祖御宮

四屋若宮

砥成宮

同祠

大將軍祠

和彦和行邸

彼岩石

走井宮

滋賀院

山王系圖

本迎寺

勾當内侍古蹟

折出濱

大掌會稻穂賣

膳所

栗津社

志賀都

滋賀浦

貫之祠

唐崎

極武天皇御塔

龜井

十禪師宮

中七社

極武天皇御廟

南若宮

比叡過

大馬井

百枝祠

大政所

地藏堂

猿塚

神宮

比叡山

苗麻神社

大伴櫻

四宮社

松本渡口

栗津里

志賀里

滋賀之輪田

崇福廢寺

幸崎神祠

土原

聖眞子宮

明星水

下七社

慈眼大師廟

登町若宮二社

若宮

生源寺

小立月會岡

王子宮

早尾社

塔下惣社

神路山

四明嶽

堅田浦

眞聖入江

精大明神祠

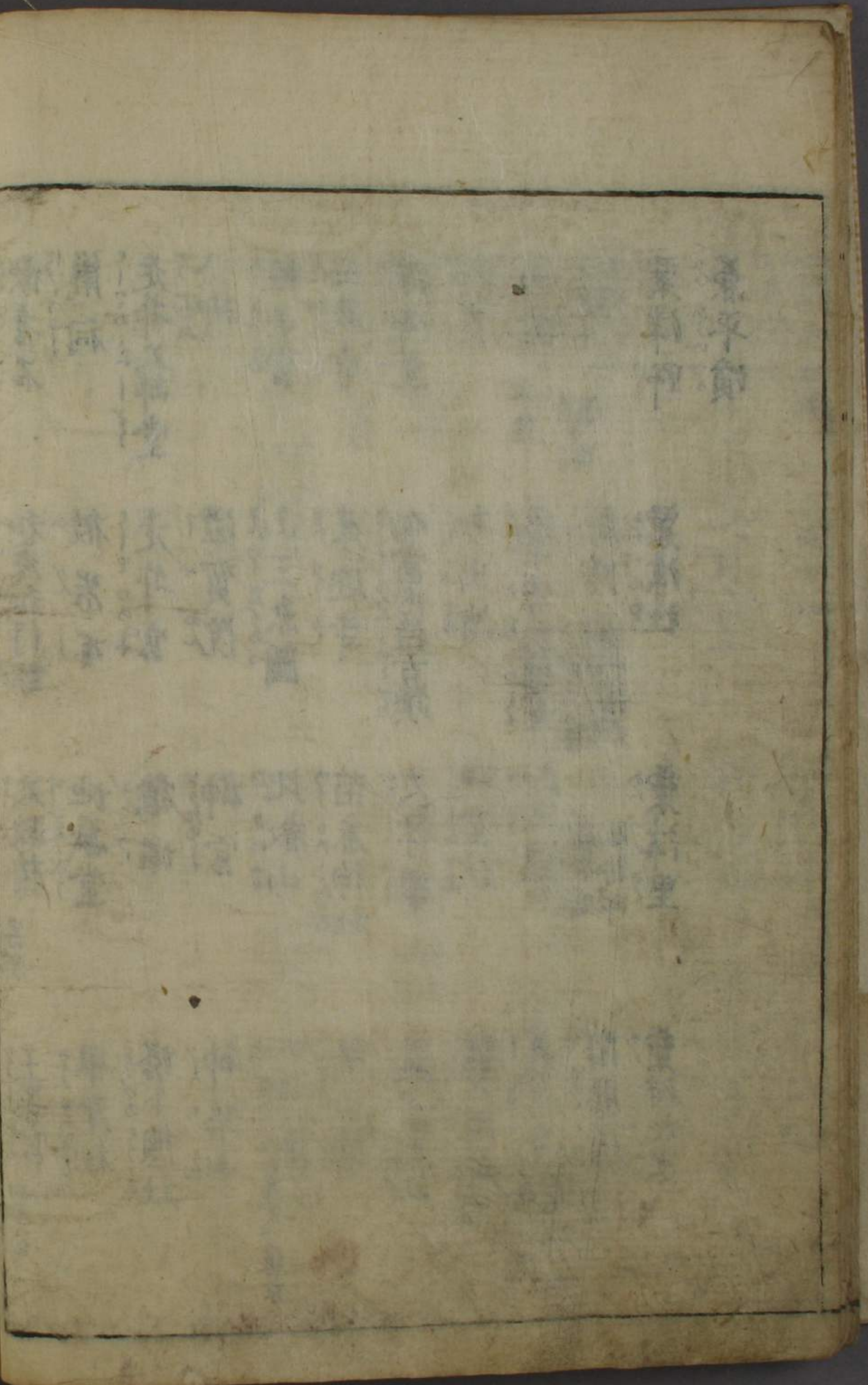
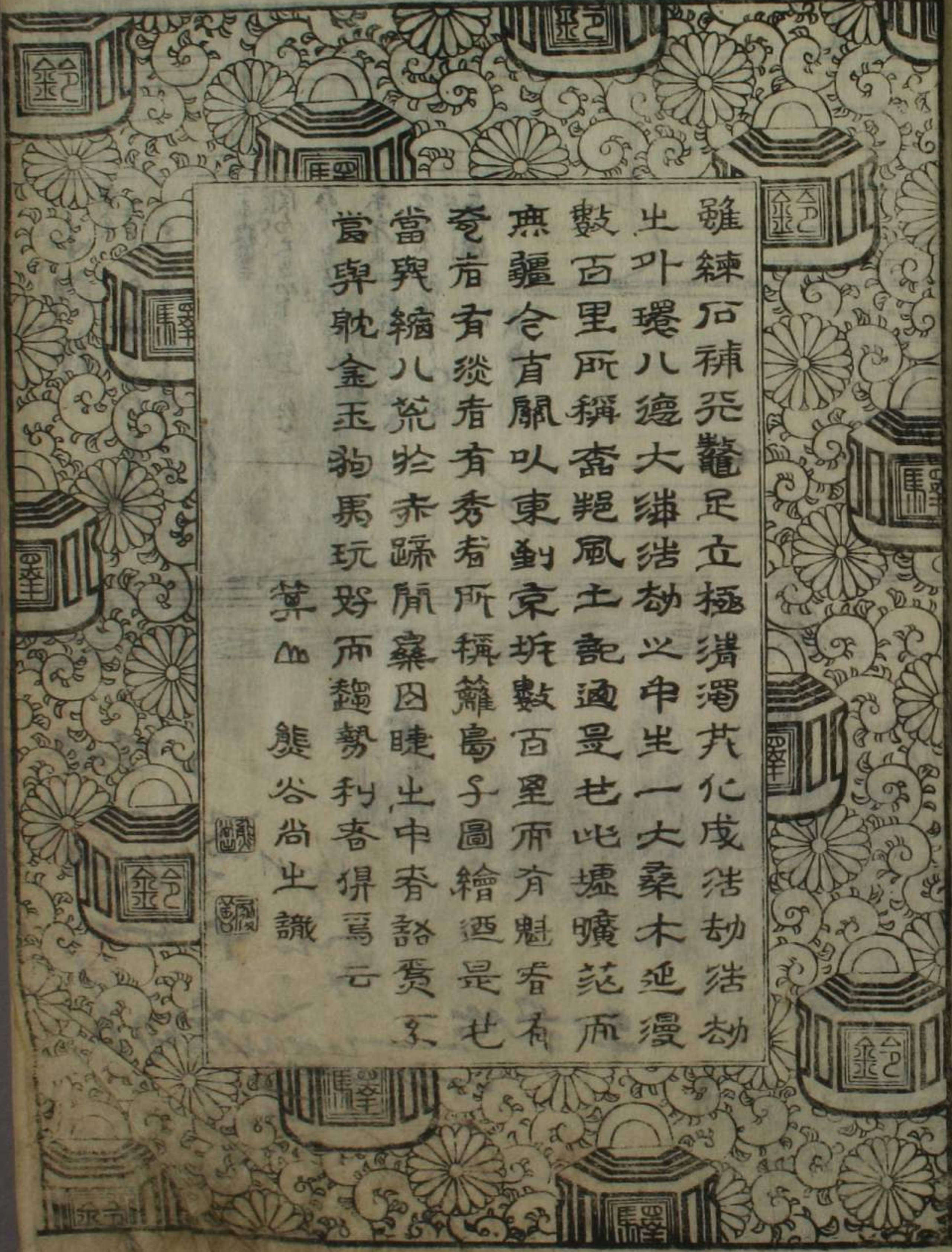
義仲寺

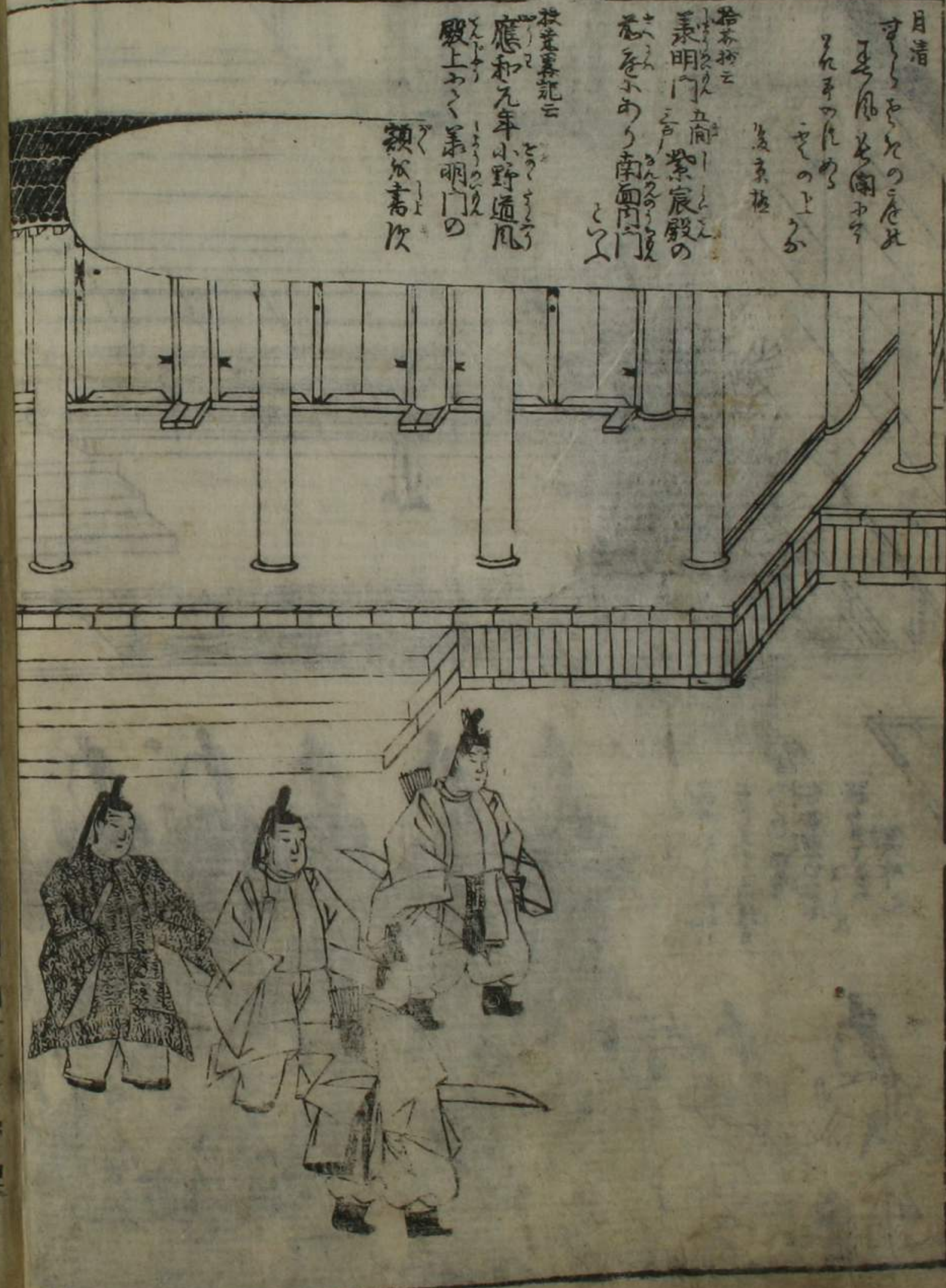
陪膳濱

栗津松原

雖練石補元鼈足立極清濁其化戍浩劫浩劫
 出叶環八德大緋浩劫以申生一大桑木延漫
 數百里所稱畜艷風土訖適是也此墟曠茫而
 無疆合首關以東到京坻數百里而奇魁者有
 奇者有從者有秀者所稱籬島子圖繪迺是也
 當與縮八荒於赤跡閒藁因曉出中春詒賈云
 當與軌金玉狗馬玩好而趨勢利者得焉云

箕山 熊谷尚止識





月清
 五月廿七日
 其の上
 後末極
 若木抄云
 美明門（高）紫宸殿の
 志をよめり南面門
 校定書記云
 應和元年小野通凡
 殿上（美明門）
 額が書次

史
 記
 印

單薙御劔と申奉り初の御名は天叢雲劔と申あり

八咫鏡草薙劔之三種神寶は天孫小孫授けし永天璽と云

日本書紀曰素盞鳥尊出雲國鞆川上小大降すはれ時啼哭聲聞ゆ

あれは母の老るまの母の者あり其中小ま人の少女をばとて極く悲しむ

素盞鳥尊向をすはれ海邊に推しおし小駒の慈をばとて極く悲しむ

祈の國神之名脚摩乳妻は小駒乳と云はれ其妻を女に吾見たりと云

奇輪田原と云はれ此中小八岐大蛇あり往小吾見を多くて今又も人

孫に少女をばとて吾見をばとて吾見をばとて吾見をばとて吾見をばとて

素盞鳥も俱小歎たすはれ大蛇と戮をばとて吾見をばとて吾見をばとて

老人大も喜ひ初小随ひも小素盞鳥尊輪田原の湯はの爪櫛はやり

御鬘系杯の中ま婦人の槽小酒を盛て待たる早其期小至る山河震初大蛇

現れせり首尾小岐あり眼小酸醬のふし背小松柏生茂る八丘八谷の向小葛

延く頭と上八槽の酒と飲下酌酌して眠る其時素盞鳥所帯も八十握

劔を抜く大地と寸小斬り尾小至る劔の及び一缺り則其尾を裂く視

ゆは一の劔あり大地の所居る上小常小村を覆々し大藪を劔と断り

其より此寶劔人代小傳り神日本靈余彦天皇神代の蹤と魁日向國

宮崎小都に居り此時天下草昧ありて封域いまも定る故小寶劔をひく

四海と治め初る帝素盞鳥大和國橿原宮小遷幸ありて厥后十二代大足彦

刃代別天皇景行二十八年春二月朔日皇子日本武尊筑紫の叛賊熊襲を

一舉小滅し其國を神謚するは是九州院小治る百姓累々之福也同帝紀四十年

夏六月東夷叛逆のり小奏次命天皇斧鉞を持て日本武尊小授け東國

安泰をばと詔ありて曰朕聞東夷の識性暴強ありて凌犯成宗と云

邪神あり邪小女鬼あり乃小街衢小遮りて人々を弊し其賊徒の中小賊夷

を強し男女をばとて父子の別あり冬小穴小宿る夏小棲毛小夜と云血を飲

昆侖相疑ひ山小登半飛禽の如く邪を行る事走獸の如く擊つ草小踏小追

ふ小入る人小民と略む古より已来いまだ王化小深し今朕汝を人となす小身體

長大少く容姿端正之方に純貞と枉る極に平雷の如く向ふ所故なく攻所
必勝と云ふ事か、則ち之體の吾子や、實に神の命を定むる朕の
と怒る國の不平を詳論し、天皇の經綸宗廟を不易あり、人の命の
是天下の則ち天子の朕の位に則ち謀の深く、遠慮を暴賊
姦鬼を攘退し、詔あり、日本武尊、斧鉞を授け、再祥して奏し、曰
嘗て西戎を征するの年、天威を施し、秦楚を戮し、其後、決辰を經り、
東夷を暴逆、次速乎天神地祇と祀す。天皇の聖恩を感ず、其境、
徳教を示し、猶服せざるものあり、忽ち兵を發してこれと誅討す。四海を
敷敷と慰まん。天皇亦吉備武甕槌、日連、日本武尊、小碓、
七捕、脛、公膳、まゝ、冬十月朔日、威風凜凜、出陣し、まゝ、
枉道して、伊勢皇大神宮に再祥し、倭姫命、小碓、曰、今、詔を被り、東征し、
反賊を誅んと欲す、於是倭姫命、寶劍を授け、慎み、怠らざる事、
命、日本武尊、亦、立、駿河國、小碓、其地、其賊、陽從、ひ、尊、と、欺、て、曰

け、郊、小、麋、鹿、あり、氣、を、霧、の、ゆ、く、足、は、茂、林、の、ゆ、く、あ、小、碓、を、將、り、の、と、奏、次
尊、其、言、を、信、じ、曠、野、へ、入、り、悠、然、と、て、覓、獸、し、中、に、女、賊、賊、思、圖、小、將、と
相、圖、の、狼、煙、を、上、が、れ、を、伏、勢、一、た、な、む、其、聖、を、放、火、し、大、兵、を、麋、鹿、を、以、て、尊
驚、破、謀、を、ぬ、と、知、り、く、佩、を、落、し、霧、雲、の、寶、劍、を、と、り、ぬ、と、尊、と、推、攘、ひ、ら、た
と、ひ、ひ、の、風、忽、然、と、く、霧、賊、軍、上、吹、靡、た、猛、火、熾、ふ、れ、賊、兵、途、に
喪、ひ、烟、小、噓、で、倒、れ、外、を、風、威、い、よ、く、強、く、突、四、方、小、備、々、た、し、を、逆、賊、殲、む、と
討、と、ふ、ら、う、於是、草、薙、神、劍、を、改、め、其、聖、を、燒、け、と、い、ふ、尊、直、小、進、ん、と
相、模、國、を、越、上、総、小、碓、を、越、し、海、上、を、渡、ら、せ、り、暴、風、忽、起、り、て、天、船、を、覆、さ、る、に
尊、の、從、り、小、愛、妻、橘、媛、宣、ふ、今、風、つ、く、と、清、必、歸、舟、と、い、ふ、海、神、の
祈、禱、を、願、ひ、妾、尊、小、贖、く、海、小、入、尊、の、所、身、を、擡、り、と、い、ふ、尊、上、總
中、に、暴、風、忽、止、ん、と、王、船、を、着、岸、し、故、時、の、人、其、海、を、馳、水、と、い、ふ、尊、上、總
より、陸、奥、へ、入、り、蝦、夷、の、子、孫、を、悉、平、げ、り、凱、陣、の、所、時、碓、日、嶺、小、碓、と、東、方、を、臨、み、
三、歎、く、吾、孀、者、く、と、宣、ふ、於是、國、の、を、り、公、吾、孀、と、い、ひ、風、俗、を、か、ら、し、縁、を

都のあそび 祇園のあそび
 春のうらた 美濃の初花
 咲きつらぬ 地まの櫻井
 雲と月と 君とわが心
 貴族の娘は 春の歌
 蹴鞠の言はれ 春の歌
 花柳の言はれ 春の歌
 東の生花 競揚子の春
 二町茶屋の豆蔵切
 春これぞ 祇園の神
 とぞぞ 心ゆく 祇園の
 鈴のあそび
 東の水の清く
 洗ひみぎた
 美顔と粧ひ
 美振と夜と
 月花のあそび
 春のあそび



一柳あそび
 水至りく
 春のあそび
 東の方先生
 實然と





夫名劍の徳ハ釋名曰劍ハ檢あり非常と防檢とるの所以管子云檢とるふ
 ひ一葛天盧の山と發く金以出次虫尤あれと得く劍と製次名云劍體と
 是劍の始之周官の柁氏劍と傳る厥后楚小龍泉あり秦小太阿工布あり兵
 干將鑄耶あり狄小純鈎湛盧袁曹魚腸巨闕の諸劍あり漢小高祖の斬蛇
 あり二尺と提く天下と取る魏小文帝の飛景流彩華鋒の二劍ありあはれ
 天下の名器之我朝も小焉勝九髯切珠珠切小狐等あり和漢名劍と賞
 して天下と流る事古今ふゆく一例あるを
 古今物名 ころころけ
 花の色はひとさうらとたれも又とくそ落はそめけけ ながむら
 桓武天皇平安城と興基ありさうら結繩の政とく天下と化成一加之代を
 聖主徳公踏仁と詠ト上古の風同く群生と植育く歩ハ四海
 みく億兆の威と彌らんとぞ見ふなる光慶御曙の記云延喜の御事云を
 又ねた例申す申れとせれもさうら白奴孫とさうらちたあふも見く
 たり今園のをく戸ざりわをんと天下卓錫の地をとさやあはれと



東二條の森北方
 世もいふ名宿の跡
 老翁の語り吾妻下り
 江戸坐り作務
 さいらの坂途ひきと
 日岡路の上の茶店ひ
 集ひく酒庭と催
 のへん儀別留別の
 詩弁と送るも
 多かりた
 旅まやうの日の里ふ
 足送りく
 益と
 掛け上
 ほろよ



江戸
 老翁の語り



大津繪の
 茶の
 手紙
 何紙
 とも



大津繪を
 ひらきあふ
 若位といふ者
 種々あり
 一より今
 小具茶
 遠く古雅
 あつた名お
 と賞どけ
 あらん



下河邊 維意 寫 羅 志

學
秋



木
成
受

遠
坂
山
明
神
九
洞





彈琴妙曲起 隨風
 送入黃鐘六律通
 意有聲明今古說
 琴音湖上解絃中
 秋藤鳥



暉丸

木庵受

走井

走井の谷町茶店の別荘あり後山あり走り下りく備出する千膳とく

走井の丘中とある名あり坂の園引おゆるゆるゆりかけの駒

走井のかけ樋の水ふかゆるる若神の山乃本茶と有り

走井のかけ樋の旁いたふひけとのやうふとあるを月の駒

百茶堂

走井の谷の上のふりうり頼の百茶堂と書け州廬の茶厨子

益原薬師

百茶堂の右ふりうり石依の茶師と書け

遠坂

文徳天皇天安元年初く遠坂園と書け

衆一十人兵具嚴重小競く金剛が士の如く

氏正徳年中寺門と講論たひひい事

新園 遠坂の園と書け

山内十基清尉と書け

若神の山乃本茶と有り

遠坂の東海と書け

相坂の園と書け

色あつるみけ中ふ秋まきく又遠さゆあふさうのせき

お坂の園の杖むく書清く乃ある清代と書け

横まの山小別とくあり坂の園は其の聲を明かす

今もかを戸くやけぬ猿人の乃をたせふ遠坂の園

走坂の園は杖むく書あつくまきく足くぬ夕かけれ駒

くひける駒あつくまきくこれ伴の道とあり坂のせき

走坂と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け

お坂の園と書け



近
松
河
坊
世
喜
寺
斗
塔



大津 津屋町のたれ
 五月十日 青の
 津の海一町の
 水にみくろ 猪隊
 の屋敷のあつらひ
 上志賀都大津
 宮あやむいさく
 の遺跡とまきくさる



香泉堂

大津

永師より初の驛とされより東に海東とて坂東とての肉東二十八州西
三十八州東よりありて三千里に及ぶ十四里又茶は三千里半餘
滋籠町の多岐八町とては地味小針及び淡海國中の境也奥也等
諸侯の威運び日孟小字成ありて京都一交易次町敷九十六町
在津多し

夫本

我命はさうくあふもるん志は天津よりさる白浪 漢人志

夫本

秋の日はかろしむのりみち系は天津の里れびさうり 清秋

新説

閑然くうれしむる天津馬とのう一つれはいそくあり 和泉

夫本

天津宮 日本紀云 天智天皇紀五年是冬京都之鼠向近江移 同帝六年三月辛酉
明已卯遷都于近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多云云

拾五

志野ふふうと夜をふ入せも天津の宮よりま乃花園 徳島

夫本

さく波や之はの宮小月をみくるとそつれ之保る崎中七 貞隆

夫本

大津皇子 交武帝時皇太子日本紀云容止端岸音律俊朗也 大智帝と
愛せられ長ふ乃んく文學ありて文章と愛は詩賦の興大津皇子
より始りては是時公

夫本

日本詩賦の初々々 懷風藻

夫本

関於臨靈沼遊目放金花澄清苔水深暖霞峯遠 大津皇子
驚波共絃響呼鳥與風聞群公倒戴帽彭澤真誰論

夫本

春花言宜

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

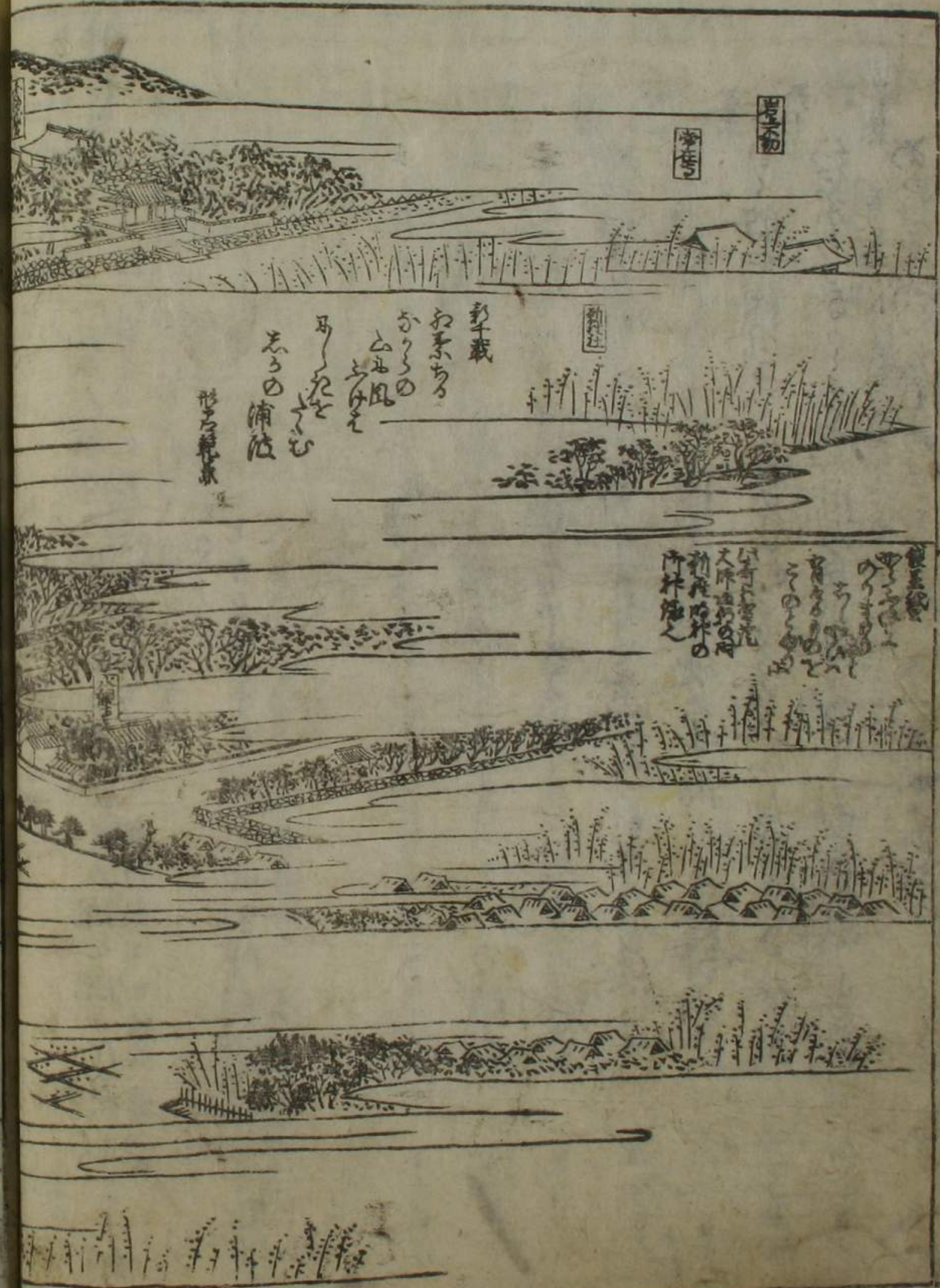
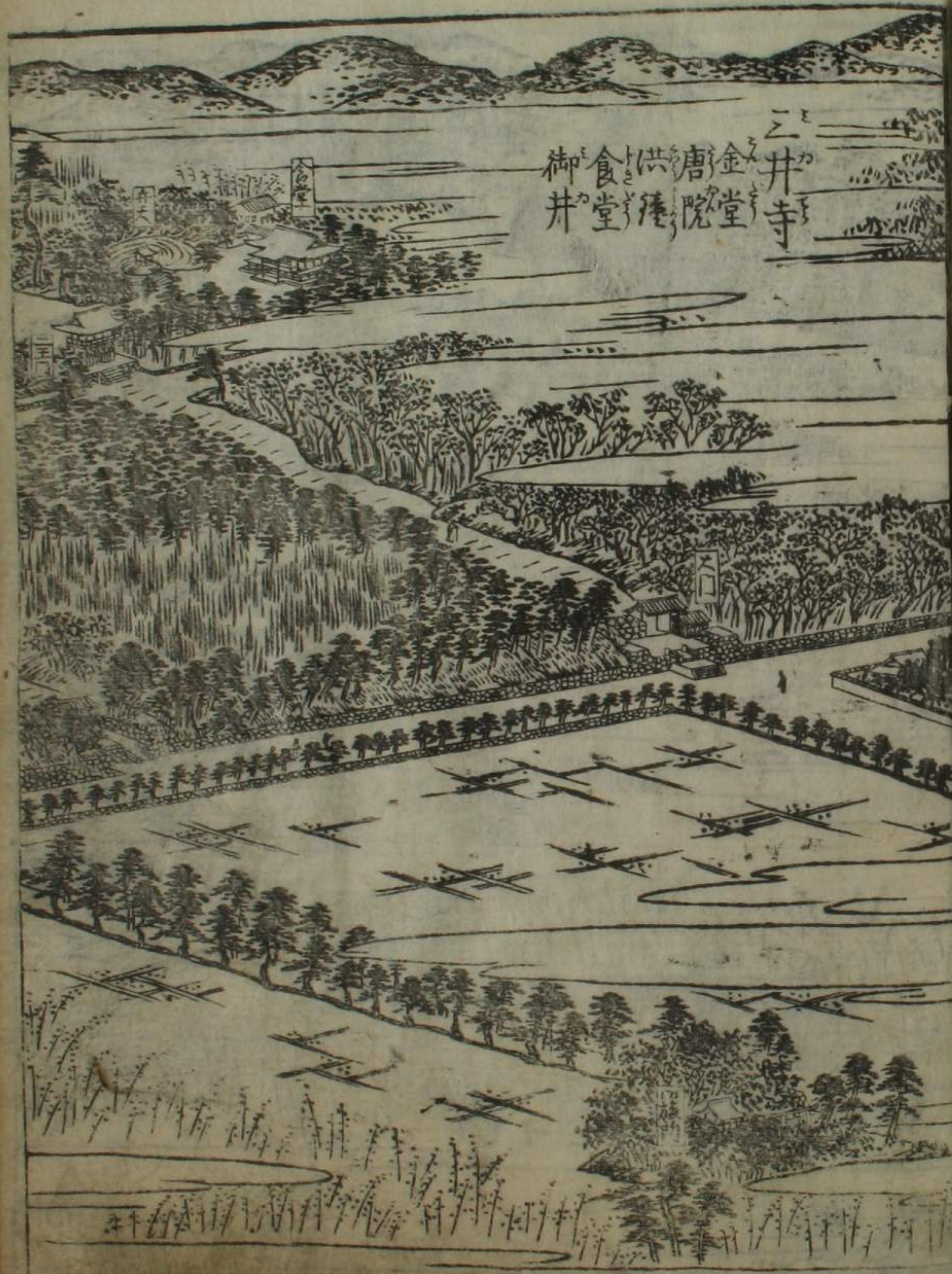
大津皇子

夫本

大津皇子

夫本

大津皇子







淡海公景

三井晚鐘

湖面朦朧畫

不成音聲高

閣出園城霞

間好是客飛

月十倍楓橋

半夜言

相國寺林長老

あまのの境

まげとく三井乃

入めいの序

邊清園の時景



新井村

新井

いづのつれなき

うらたけの

新井村

尾藏寺

近松寺

八景樓

長等山園城寺

志賀郡長等山園城寺又寺門と林次

玉葉

さかみや二井の古寺のありてむらさきなる聲はす一皮

古田

五葉

かみむらさき海のそふまゝなる二井の清水ふるる月影

通球

浪たたく鐘の音とをまねゆへ

さかみや二井の古寺のありてむらさきなる聲はす一皮

後藤

丈當山も原

天智帝第五の皇子大友の殿舎あり莊園城邑の地おれ

園城寺と號

又次又祇園精舎紺園化城も比とるゆゑん元初同帝六年

大和國飛鳥宮より

樂々波大津宮不遷都ゆへて日七未天皇帝

後天感

く出宗福寺は建立し金毛丈六の弥勒佛と安し其翌年又

園城寺は系創

寺門傳記第六日宗福園城寺天智之御願皇太子大友

一年故首

厥后大友與多磨天智帝皇子五男也其男都堵磨相議

天智帝の遺勅

を奉りて大友皇子の追福のため宗福寺は他へ移し

園城寺と再言

新けおれり殿堂巍々壯嚴玲瓏とて給孤乃

布金

其頃教待仙僧あり練りし貞觀元年の長智證大師

小見く傳法

授與し東北の石窟入定を其より大師入唐して大台山

登り清涼山小峰

と文殊の畫跡をわし開元寺を龍さ小塔し石象石橋

巡り蹊密二教

と宛先在唐六年ありて瑞朝し法和光孝陽成二帝

の戒師と成實

祚延長と稱し國宗泰平と號する於茲三會は晚公期し

寺門の繁榮

益熾と長等の山極入相の種は後を丹後と傳は乃月を

佐々波はほ

星宿果れを騷擾の愁あたりもあはは活活系み源三位

頼政は高橋

平家の暴逆を加藍公弊せしれ行尊ありあさち原子

らんと述懐

と詠し天地老く山河更に龍虎争ふと系本腥し衛

右大將頼朝

卿も當ふより膝状と捧しかき平家没官の地を壽府し

中入事東鑑

小見くよりありの平家お治太平記にも記さ小見く

くは爾瞻

災はけ寺の高僧記も延暦寺より一百餘年魁とて

ありしは

若れ三井の古寺と稱せしも宜なりん元家初天智帝

逆長入鹿

を戮し其罪障を悔中へて建管ありし事高き時基

松 施 乃 幣 帛 乃 妙 披 色 數
賊 尚 乃 恩 德 不 限 乃 良
和 山 松 尾 大 明 神
西 門 中 心 天 王 寺
東 成 天 皇 敬 比 比 天
陽 子 天 子 貴 比 天
亭 台 弟 五 乃 座 主 登 志
天 城 弟 二 乃 貫 主 仁
園 切 傳 法 論 三 百 簡 遍
諸 尊 餘 人 髮 乎 剃
五 百 道 俗 歸 波 敬 志 剃
王 臣 萬 里 美 問 波 志 加
千 弟 怪 化 乎 遠 久 見
門 弟 乃 遷 禪 師 加 去 志 日
良 瑋 入 禪 師 加 去 志 日
元 載 禪 師 加 去 志 日
圓 載 禪 師 加 去 志 日
時 仁 此 等 乎 開 志 冠 日
後 乃 日 宗 人 告 志 仁
寬 平 三 年 冬 乃
十 月 二 十 九 日 仁
其 時 十 方 世 界
天 乃 音 後 樂 雲 響 一
大 師 頭 乎 擡 氣 志 仁 日 義 乃 曾 天 曾 人 波 波 天 波 呂 天 利 人 遍 天 天 天 天 寺 神 良 色 數

神 醜 感 乃 實 仁 甚 志
醜 乃 妙 味 乃 希 乃 志
詞 乎 通 志 憐 波 乃 志
最 勝 講 於 曾 始 免 置
法 和 尚 仁 補 令 叙
樞 僧 都 仁 補 任
二 十 僧 年 戒 弘 授
三 十 僧 年 戒 弘 授
大 十 僧 年 戒 弘 授
三 十 僧 年 戒 弘 授
德 十 僧 年 戒 弘 授
三 十 僧 年 戒 弘 授
金 剛 薩 埵 乃 告 登 在
鐘 舉 天 曾 悲 泣 須 氣
聲 舉 天 曾 悲 泣 須 氣
淚 舉 天 曾 悲 泣 須 氣
一 事 毛 怪 流 舉 天 曾 悲 泣 須 氣
生 年 七 不 違 信 乎 取
大 聖 槃 仁 波 八 仁 志
菩 聖 槃 仁 波 八 仁 志
定 聖 槃 仁 波 八 仁 志
三 弟 乃 結 天 眾 仁 入 滿 給 志
門 弟 乃 結 天 眾 仁 入 滿 給 志

承 和 五 年 冬 乃 月
嘉 祥 三 年 春 乃 月
文 德 天 皇 宣 下 志
唐 乃 大 天 皇 宣 下 志
天 涼 山 仁 仁 登 天 天
清 涼 山 仁 仁 登 天 天
長 安 洛 陽 迴 望 天 天
西 天 唐 土 乃 師 仁 遇
法 全 關 尚 乃 開 元 寺
南 嶽 天 台 遺 身 塔 寺
石 象 石 橋 見 渡 志 塔 寺
顯 密 教 橋 見 渡 志 塔 寺
自 宗 密 教 橋 見 渡 志 塔 寺
歸 朝 乃 波 仁 波 昔 無 東 幾 天 塔 寺
清 和 天 皇 元 新 羅 國 幾 天 塔 寺
新 渡 乃 法 門 千 餘 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
爾 時 大 師 奏 聞 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
百 六 十 年 行 遼 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
國 城 寺 仁 天 波 勅 仁 依 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
仁 壽 殿 仁 波 詔 平 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
金 光 殿 乃 齋 會 仁 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
清 涼 殿 乃 決 疑 仁 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
熊 野 山 乎 攀 志 仁 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
八 尺 乃 飛 來 志 仁 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺
權 現 三 所 乃 飛 來 志 仁 兼 氣 里 留 志 軸 仁 國 幾 天 塔 寺

大 聖 明 王 感 見 志
入 唐 求 法 被 許 志
嶺 南 道 爾 着 氣 志
大 師 乃 聖 跡 巡 禮 志
殊 名 靈 地 乎 巡 禮 志
文 地 漢 語 乎 窮 多 踏 志
一 乘 心 蓮 花 雨 灑 開 氣 利 美 志
無 智 水 影 像 院 久 氣 利 美 志
銀 地 金 地 毛 修 行 志
在 唐 章 疏 千 餘 筒 志
經 論 乃 善 神 影 志
樞 化 師 乃 善 神 影 志
大 宣 師 乃 善 神 影 志
勅 宣 師 乃 善 神 影 志
三 身 仁 唐 坊 建 給 志
宗 觀 入 僧 勒 乃 附 屬 志
王 子 迦 彌 正 灌 頂 志
護 法 清 辨 物 登 須 志
道 迷 天 不 知 程 登 須 志
道 示 曾 奇 特 奈 加 波 志

志賀里 三井のふし四村あり 志賀西郡正興寺

神よふ都の月に夜移しくおりのやゆる志賀古里

橘の花やりの花のそんをむくの志賀古里

志賀花園 志賀里 新立家

志賀や志賀の花園をまに首人乃の志賀

志賀守あたこの志賀ふして昔も志賀志賀花園

志賀山城 志賀里 赤坂より 登り 峠と 城 山中里 白川村

志賀山城 志賀山城より

志賀山城 志賀山城より

志賀山城 志賀山城より

志賀山城 志賀山城より

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀浦 大津の浦より 幸崎及び下坂

志賀大膳田 今さらあ

志賀大膳田 今さらあ

志賀津 今さらあ

志賀津 今さらあ

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守

伊勢守



忘賀の上人ハ
 八尋の杖と
 勢眉小八字の
 瓶ハナレハ湖水
 の波ハ想観と
 成中ハ赤子系後
 う所真所志賀
 けた用のマツコ
 と上人ちりり
 況とらお想
 起りて多年
 のり徳と誓ひ
 白入ひりハ福
 多事年々
 せんハあし吉
 養せ置ぬ末の世
 破戒の出来ハ
 ぬと人し
 ちハ行樂
 勉徳の事
 傍多た
 ゆるは



下河邊節意

續日本紀曰

弘仁六年八月乙酉以近江國朝書法一百卷施入崇福寺

類聚國史曰

四月幸近江國滋賀縣寺便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率

衆僧奉迎於門外 皇帝降輿升堂禮佛更過梵釋寺傳興賦詩

群臣奉和久僧都永忠自煎茶奉御施御被即御船泛湖水國司奉

風俗歌舞五位已上竝掾以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差

延喜式曰

崇福寺傳法會料一萬束修理料五千束

太平記云

むう志賀寺上人より學塾修の聖也かかりて速く彼之界の火宅
と歩く永く九果の津利ふまんとおひいふ富貴の人と見ても養中の
快樂と名ひ容色の妙なるを逢ても違ひのおれ着想と憐むまを隣乃
其の居るやうにやうと住むふふの極一毫のねも杖風ましく成ふやう
あり附上人草庵の中と立ちゆくもふ一為の杖とて眉ふ八字の痛とふれつ

湖水波志のうあふ向く水想觀と成くゆを爲してまをそん立申ひする

新ふ系極の清息新志賀のた園のまはきやまを清流とく清流をわく

々る清車のおん瓜あけられふは上人清月はんをせすのせくおやん心

まをたたましおうのせふたり遠く清車のおん瓜見送るて喜ぶたふおん

をるる方もかううたれは其の居る立席と奉尊小向ひきりて観念の

床の上より妄想の化のまをひく林名の聲は才女たるのうら大息のまを

けうはるねもあかぐさむもやう業のまをさうむむいんをさうたまひ

閑窓の月ふうをゆけは志もねおひあふう今生の志念つおみ難とまを

後生の隙を成ぬたれはねおひのゆたき清息新ふ一燈やう心をそく

條後とまををさひく上人猶未小鳩の杖ははさかく素極の清息新

清新へまを鞠のつねはゆそのふ一日一杖を辛うけける知の人をれいふ

修り者まのしん人やうんとあやむいもかうりたり清息新清息新

内よりさうふ清流せれく是れいさほ志賀のた見のびる五月と



卯のさたの
 ねの花より
 朧みく
 三三三

ね末
 さく波や
 志々の候に
 ありふたり
 清世ふ
 ねの
 子日
 あくん
 佐成

明光秀波



十重
 卯のさく
 卯のさく
 清月れ
 光と
 やかん
 三三三
 佐成

唐崎社
 一ツ
 ね

唐崎社

明智守助の
 山崎合戦にて
 坂本城をゆく時
 大津より松葉方
 坂本より先鋒不
 図れ詮方かく
 名もた駿馬の
 糸をた湖水の
 さふく糸をた
 結を永徳の
 主龍の陣羽織
 三つ角の虎と着
 威風凛々しく
 湖上をゆく
 舟の松乃
 汀に着し
 古今の雄將
 徳の頂王乃
 鳥江とつり

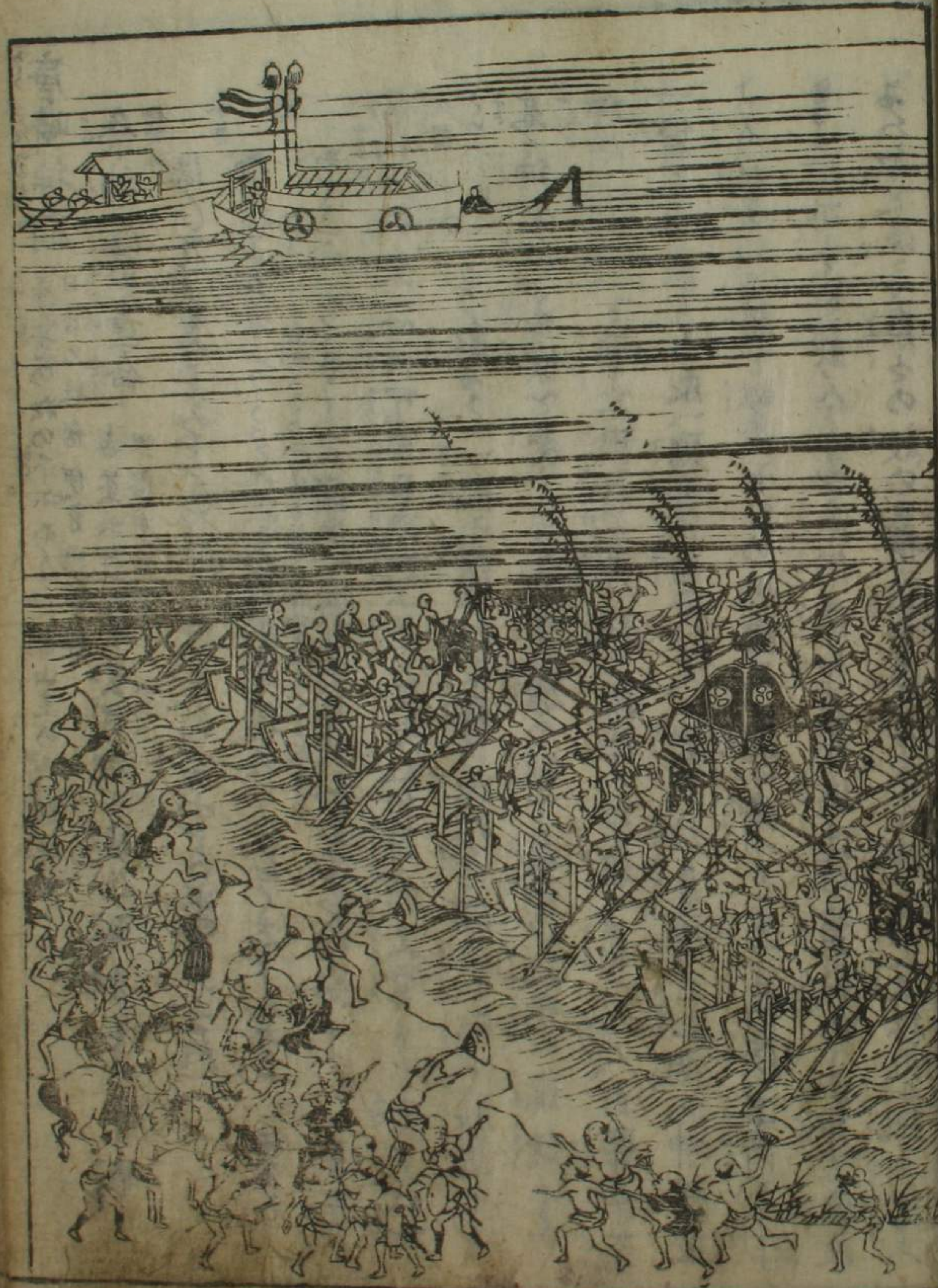


おまけに
 飲味方
 見て賞嘆
 とつり

思く海河
 口より上
 小舟に其
 舟に懸
 付歩のま
 ありたつ
 昔の依ま
 もまれの
 舟に懸
 舟に懸
 のおひ



漢精中集



山王えんわ唐寄たうき神供しんく

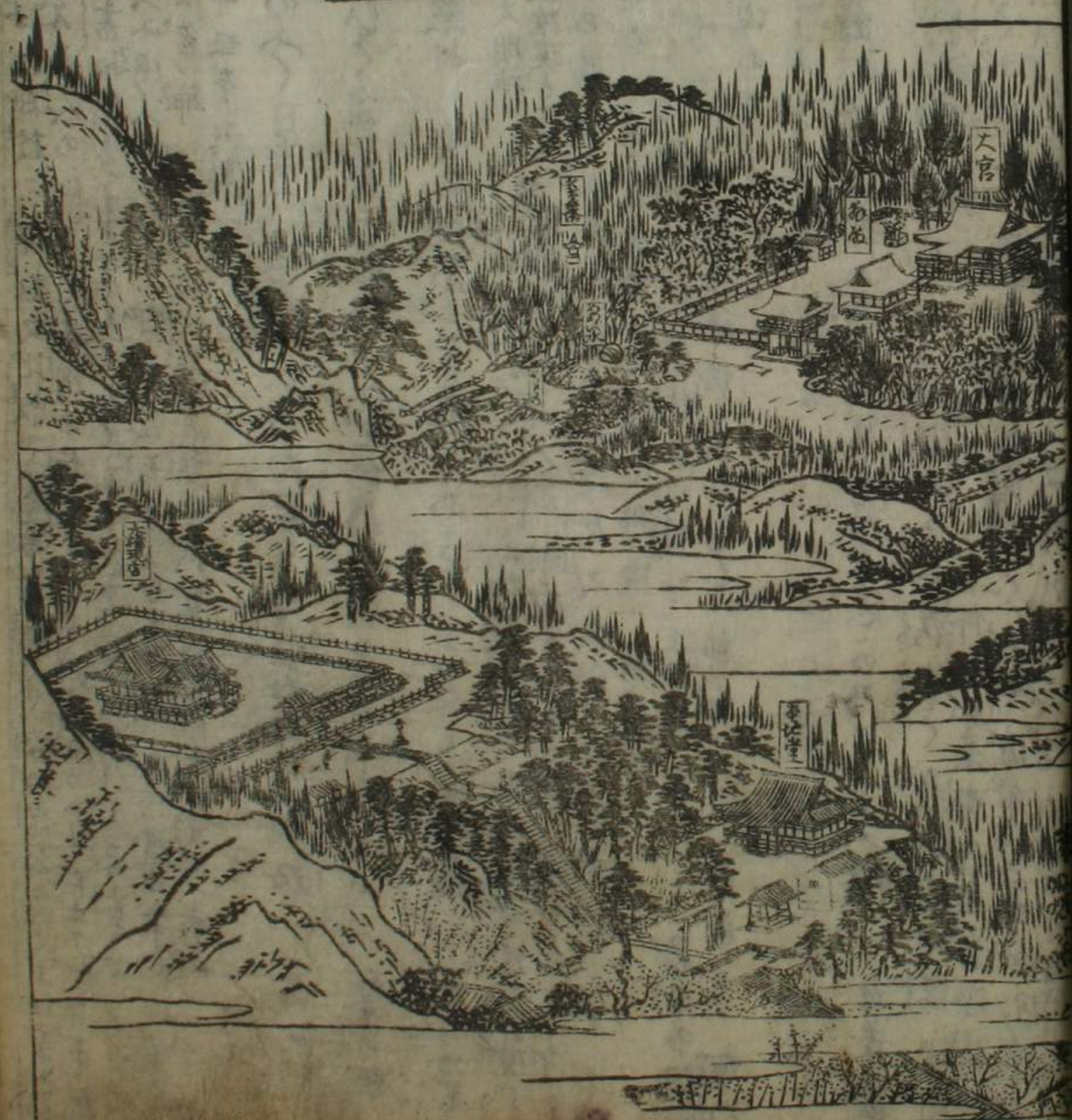
東坂
西教寺
本遠寺



晴龍不伽う四時蒼々や一ふ君子の襟は雁一霜雪は凌ぐふ葉は
 庸と及湖廻る朝日ゆけらねの葉あしたの葉を葉浦う風の夕一これ
 秋志く思ふもなほ一まの庭さくも朧々さる沖の船あはさく夏の月
 涼しは不悠々うささ波の巻奏の巻初あはさくあはさくあはさくあはさく
 曙みかいたの掃糸あはさくあはさくあはさくあはさくあはさくあはさく
 實と嚙(を長生は湯の脂に地中沈く茯苓と成又龍骨と成青州乃
 貢丁固く愛始皇の五太夫小封ト玄特の保路とあはさくあはさくあはさく
 高砂曾根武隈の名ねあはさくあはさくあはさくあはさくあはさくあはさく
 とのかしりゆは雲樹の落ふややうり子とあのみやうりと湯のふふあは
 めでふふたはた一みやあはさく

懐風藻
隴上 孤松 翠凌雲 心本明 餘根堅 厚地
 貞賀 指高天 弱枝 共高州 茂葉 司柱 榮
 孫楚 高貞節 隱居 脫笠 輕
 内裏清涼殿 紙形
 本朝言書大臣
 中臣朝臣
 本朝言書大臣
 中臣朝臣

日吉山王
大宮
聖眞子
客人宮
八王子
三ノ宮



本地堂 本尊河津院佛慈惠大師
 の化洛東直如堂の本尊
 と同他同 **橘樹** 三株神木あり
 神の紋と表す
揚社 聖如神の若樂か
 信堂一龍殿 氣比洞
 共小儀あり
客人官 燈眞子のひあり
 白山の神と林に
祭神伊井諾尊 本地十一面觀
 北陸の高峯より白山未現
 客人官
影向石 延暦元年六月十八日
 祭神天瓊之持尊 本地
 揚社 小禪師洞



夢妙幢石 二宮権門のあり
 敬養とあり
揚社 岩瀧洞 聖王子洞 山末洞 八王子
 洞 二宮の馬場あり
船石 二宮の舟のあり
明星水 八王子のあり
八王子宮 崇神天皇 神位元津
 坂本小 祭神國使権尊 藤原
 大佐王子也 延暦二年
三宮 八王子山あり
祭神惶根尊 三貴女良嶽子
金岩 八王子山あり
中七社 牛神子 大行尊 早尾 氣比
下七社 小禪師 聖王子 新行尊 岩瀧



已上山王二十一社あり本地ハ大乗院
 摩訶羅刹神龍ふり何れ立る凡聖
 迷情の臆惑小あり深淵山王一寶
 神道三神取一の義山家ふり何れ
 古くは

○大権現 淨宮 眞葛原の
 上ふあり

瀨佛堂 淨宮の中殿ふあり
 本尊茶師妙來

金鼓 寛永三年 丙寅十二月と鶴と
 銘文畧に

○桓武天皇御廟 眞葛原の
 東ふあり

○慈眼大師廟 淨宮の中殿ふあり
 南光勝ら位巖
 戒壇堂の儀ふあり

後古 聖眞子宮みりてありけり
 やらう光りてありけり

日 客人の又ふありけり
 寛ふ又光らふくやうけり
 客人の社ありけり

後給 客人の社ありけり
 いみへの誠海ありけり
 客人の社ありけり

新千 客人の社ありけり
 かきかたふありけり
 客人の社ありけり



後給 客人の社ありけり
 いみへの誠海ありけり
 客人の社ありけり

新千 客人の社ありけり
 かきかたふありけり
 客人の社ありけり

後古 聖眞子宮みりてありけり
 やらう光りてありけり

日 客人の又ふありけり
 寛ふ又光らふくやうけり
 客人の社ありけり

後給 客人の社ありけり
 いみへの誠海ありけり
 客人の社ありけり

新千 客人の社ありけり
 かきかたふありけり
 客人の社ありけり

後古 聖眞子宮みりてありけり
 やらう光りてありけり

日 客人の又ふありけり
 寛ふ又光らふくやうけり
 客人の社ありけり

後給 客人の社ありけり
 いみへの誠海ありけり
 客人の社ありけり

新千 客人の社ありけり
 かきかたふありけり
 客人の社ありけり

後古 聖眞子宮みりてありけり
 やらう光りてありけり

日 客人の又ふありけり
 寛ふ又光らふくやうけり
 客人の社ありけり

後給 客人の社ありけり
 いみへの誠海ありけり
 客人の社ありけり

新千 客人の社ありけり
 かきかたふありけり
 客人の社ありけり

後古 聖眞子宮みりてありけり
 やらう光りてありけり

日 客人の又ふありけり
 寛ふ又光らふくやうけり
 客人の社ありけり

两部習合しつゝも亦尊しむりより本比と仰ぐ一畠跡を神とて
浮屠氏のあるひ願ひ奉地と神あり一畠跡と仰ぐ一は我神園の本柱
の初まを験する也

日吉神詠告傳教大師 羅山子神社考出

阿良之毛 左 牟志 登布 比 登度 奈志
あつりやうのうの子日此小ねおひん末まてさういしと屋

あひふらひく日若のそそるあつ七の星乃照為光平

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

拾玉

あまのむ七の社乃ゆいそをたゆけても六の道にゆくこれ

意田

○四ツ屋若宮

下坂本支例小あり
大將軍祀り

○南若宮

社比同前小あり
客人宮の一軒あり

○登町若宮

下坂本支例小あり
客人宮の一軒あり

○同社

日吉山あり八王子の一軒あり

○奥成宮

下坂本支例小あり
神縣通延計

○磯成宮

日吉山あり八王子の一軒あり

○比敷辻

下坂本の山の端

○若宮

比敷辻小あり

○石占井

上坂本岩神岡小あり
神縣通延計

○同祠

石占井の傍小あり又社の後

○大倉の居

太神門とあり

○生源寺

馬場の小あり又社の後

○妙見祠

生原の傍小あり

○大將軍祠

生原の上五ツ軒あり

○三津百枝祠

八条の上小あり

○小五月會園

馬場小あり又社の後

○和産和行塚

南側小あり

○歡喜石

馬場小あり又社の後

○大政所富院

馬場より北側小あり

○神縣通延計

馬場小あり又社の後

○初夜

馬場より北側小あり

○神縣通延計

馬場小あり又社の後

のち殿(遷幸)七社と合さる

○王子宮

王子宮のあふあり

○氣洞

王子宮のあふあり

○彼岸所

大政所のあふあり

○早尾洞

野尾のあふあり

○走井宮

走井のあふあり

○塔下惣社

塔下のあふあり

○八柳

八柳のあふあり

○舟倉

舟倉のあふあり

○澄賀院

馬場のあふあり

○神路山

大宮のあふあり

七社下七社合さる山王廿一社と小社八十七社本末都て一百八社と

公事根源云日吉系の中申日神跡は洛西松尾の社と同跡ありて大

吹神あり 後朱雀帝長久四年六月八日小を先く廿二社の内ふくむ 後三条院

御宇延久元年四月廿日小を先くつららる云日吉社傳成考ふる白鳳二年

天武天皇即位二年社傳あり 上巳日小大津宮八柳浦山王神ありて新

湖上二艘の演舟ありて中恒世を人々晴光といふ具時山王権現

示して日汝等といふ奉寄松の下小流へ登りて二人の者あはるる則演舟

漕つれく神ありて又山王侍小日我小齊忌の神供とて一恒世對て云

演舟小好むか一美楊の小舟の中小粟飯ありて汚穢ありて神供小飯を

べしとて覆盒子の葉小盛くあはるる山王喜悅斜めりて恒世昇

漢舟小棹さしと韓崎狐松の下小到る権現又示して日吉船の神遊ひ

粟飯の神供懇小思入海宮子孫永く毎葉四月中申日小松蔭小神を

那さしとて粟飯と神供とてと云終く神路山波止土濃のやと遷幸し

申是より神系小恒例とてと古實とてと申のあ末乃日よる

○靈石

王子宮のあふあり

○地藏堂

野尾のあふあり

○走井大師堂

野尾のあふあり

○猿塚

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

○神宮

野尾のあふあり

○船子宮

野尾のあふあり

八王子二宮二社の神樂と八王子のあ殿より藤原神樂昇教十人甫
みくろけり坂河原越えたる勢ひ猛りて死生を辨けんと神樂落し
といひせれり六政所ふ二宮十禪師八王子二宮の四ツの神樂を遷し西乃
別ふ系師より神供と献す晚ふ入る獅子舞田樂あり初更の夜に相圖
ありて四社の神樂の轅と一夜ふ落しをれを一夜ふあ後と奉りて走り
まは瓜又宵宮落しといひ嵐祠のあみくあ後の務員と極り大宮を殿
ふ入る申の當日ふ山門の大衆へ横杖輔に罹り坂本の衆徒公人も
甲曹公様ひく社頭へ引烈に其時ふ猛威と震ひ神式お人の非礼に
紀と案ふまれじり官幣の勅使奉樂の道風とあたる様姿のあみく獅子
舞田樂あり神々神主代の思恆世奉子鬼令餓子に束帯みく大津
馬場村より出る七社の神樂に申の別ふ神をあり惣合りりふ越え奉り
ぬし湖石を居みくあ後の務員と極ひ神樂にふ瓜も飛ぶぬくふ走りて
ハツ柳の濱小到る諸人あれと見んとく横町と極り田圃の畔と走り又腰

刀とつげ飯前儀擔ぐ走るもあり木の葉に風小誘りてぬし七社の神樂
ハツ柳より奉船ありて奉寄り旅所ふ到るあみく順例の神供と献す
祭式畢しを又漕度一比較過のお宮の濱へ着座しやて奉社に還るか
なるあれとあみんく遠近の貴賤馬場小群集を茶店に多く英と及く休
所と設けあみ小店に物と種々を賣り酒賣餅賣粘賣引豆賣し水
囊入は的糸引烈の吹雪に群衆の中を賣りありて旅舎の泊人の座を乃
使ら瓜恨と笠と脱ざる者へ笠園の指爪を傳ふ山王系に故實ありてふ
多くと押二月中申日より冷り近郷近邊に七浦みかけを祀り種々讀ふ
七年観ぶれをてく見はけりやう奉茶果り久遠ふ及てのひりり
加程の古實今の世を殘るる祭祀稀なりて土遠境の人も生涯一たに
観ぶんをのふりてみかあれ治平安民の行事なり
十載つ
あみあひ日若の教の眞の案此戸をてもけりやうめやら
拾王
の終りてお賀儀と日若とありて奉同く卯月の神とてする
全



山王宮の御月中の由白
あはれ坂本法師の人を
古実家へし馬場通の
ひ烈莊観とて
圖とらふ
六億十人
一とあり



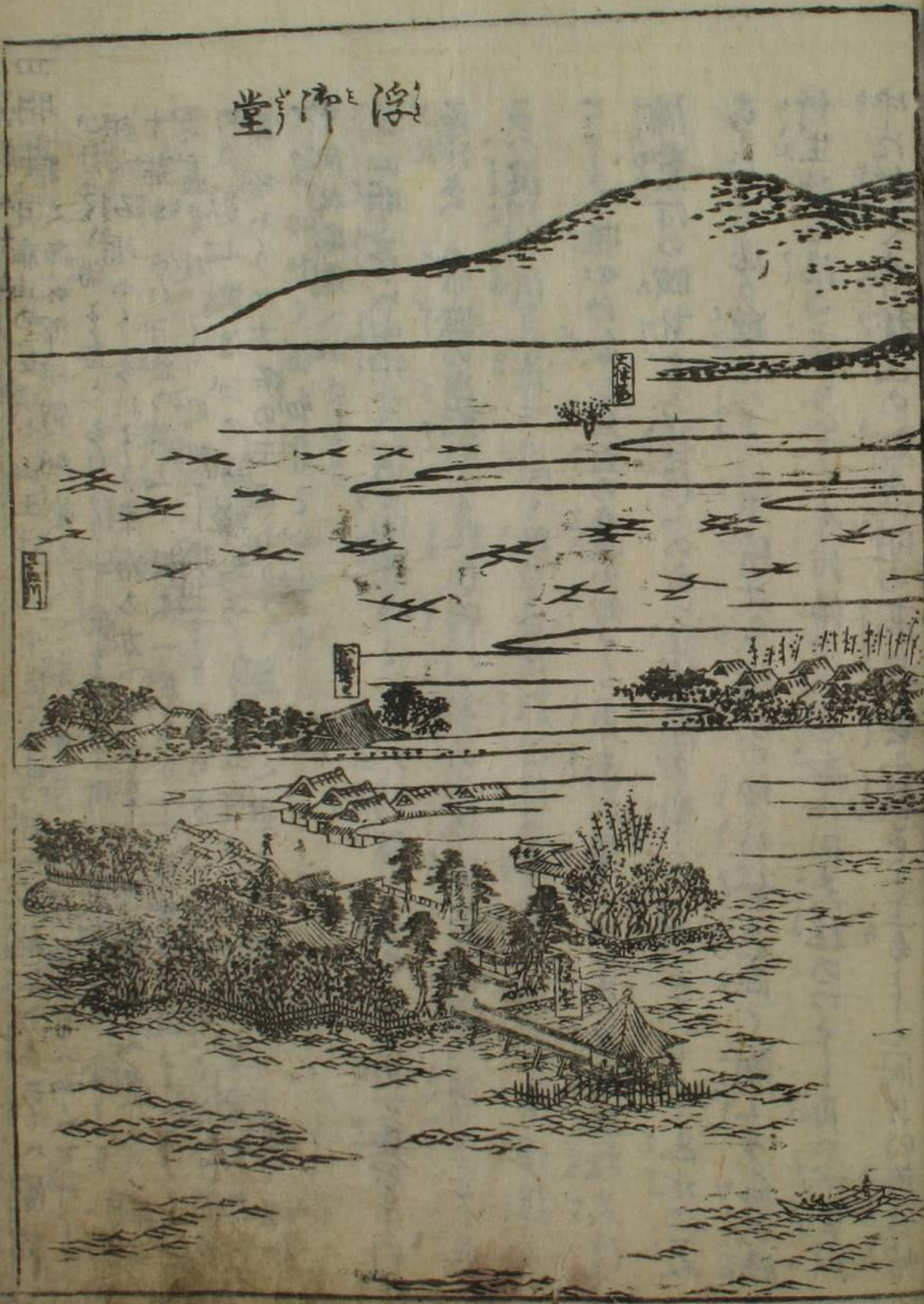


四明嶽上臨龍
 丹鳳城上瑞霧濃
 不知何處子
 青天濯出玉芙蓉
 秋 蘇 萬



天 深

浮舟堂



比良

堅田浦

鏡の夕月
浮舟堂
とら



四明嶽

此嶽山之絶頂山王社より望むと十町許に絶頂ありて
比叡山の絶頂より望むと約八日程ありて日ハ女人と評す
此社に石標ありてあれより東南の方一里許ありて
十餘年ありて甲辰の年一樹もかゝ根無のとき
此嶽は山嶽道はの國嶽と名づけられ東の方一四町ありて
廟塔あり四方派の玉垣ありて五町半ありて
中向御遺道へ出はるなり

支四明峯ハ山州第一の高嶺ありて山水清暉と倉千里小田と極むす
西南より帝城の巍然たる様ハ鴨川大井の三流愛宕高雄の連峯を去
多ハ淀川の流は長く遠く眺むれば難波津の金城其西より滄海海洋々
ろく帆の舟ハ昆虫の養小舟より東南の岨下より唐寄の孤松大津
浦粟津の城野々の長橋の方ハ琵琶湖の樂々波悠々ろく山水の美
あにそゆる遊小の上の翠密比良膽吹の雙峰黛色添く湖上より沖の竹
竹生竹も沿の上より今ハ海津の岨船山田夫橋のついで舟ハ水雲に
中に詳く會稽山の記ハ四明の高嶺を小教と名づるも同日の論ハ略

も四明峯を四明の名あり秋の日雲消し又外蒼々たる時ありて驛河乃
富士山ハ峯より見ゆるハ百富士といふ吉小糸師の愛宕山より富士峯見
ゆるの圖あり日枝の山ハおとびろくみくおさく詳ありて良嶽ハ岨下
大抵二十里の湖水乃低く其より東の方小糸尾之遠四州の向ハ高山
かゝ遠の秋葉ハ長嶺ありて高峯ありて蒼々たるより見ゆるハ一軍
疑ありて伝聞ハ弘建武の乱ありて山皇居ありて講堂の供養ハ
據事及々元龜少信長の暴逆時世ハ變じて煙塵ハ憂ハ人物
改じし風流改らば押駿の富士ハ三國の名山あれども頂嶺ハ登りて
勝隴ろくまを歩むと老小入るが如くハ東北の方海陸の口ハたありて
只旭の物ハ瓜をとり外より我立松を帝都の繁華琵琶湖ハ
八系みか月中の客とめりて城江二州の絶勝ありて良嶽といふ
良ハ根ありて堅く又卦の名ハ丑寅の方剛一陽未復の後丑ハ繫實
演く東方孟陬の辰あり故ハ王城の鬼門と遣て惡魔ハ移りて

謂之世俗鬼門柱といひは良嶽といふなり

戒光山西教寺

坂平大窪小あり天台律宗の本寺

本尊阿彌陀佛

丈六毘盧禪窟他阿彌陀佛之慈恵大師

紫雲山來迎寺

下坂平比叡村小あり天台律宗の本寺

本尊弥陀釋迦藥師三尊

同基恵心傍都他岡山堂

苗麻明神

苗麻村小あり延喜式之那波加神社

祭神天太玉命

七年小送立苗麻の神主小龍宣の奉養部傳記あり

堅田浦

志賀郡小あり大津小あり湖水の肥着

心引くひをさかぬありての浦乃あまけりけ縄

まのりての浦乃あまけりけ縄

さ波やうもさし成ふなりありてのあまけりけ縄

後久より名やたんを半へさても堅田の浦乃あり

いあひひ中もいこてはけを屋たなり中の玉章

むりしうり海海の名産小源糸糸船とあり

至つて吾あふんて官家小あり

堅田 落馬 裏沙背水 堅田浦 猶見孔明 八陣圖

浮御堂 志賀郡堅田小あり宗有禪宗海内小満月寺と号

本尊阿彌陀佛 左右小化伴一千餘と安次

弘法大師の他地蔵菩薩等安次満寺初

傍都の同基菩薩の草堂とあり

先明縁小ありは浦右来より

腹際小ありは浦右来より

再興に及ん又其裁必あり

勾當内侍古蹟

今堅田の田中平堀あり毎茶九月八日表入り

左中將義貞ふりて東の御の中

左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中
左中將義貞ふりて東の御の中

大伴櫻

直聖入江

大伴櫻 堅田より西の方五六町山原田圃の中小堀あり其上櫻あり
直聖入江 堅田の小堀あり真聖村真聖川あり

鶺鴒かく海の入り北溪風よお花波よる秋のゆへに
吹おろけゆく風の荒や寒やんまの浦人衣う川あり

秋半小吹溪風をまの浦北入江の子らう今を唱あ
其時の浦上舟とたつる若菜と入江の波小月そとるけさ

冬うしのお花とてあまらる名入江にも氷るまの浦風
礼堂の月むを北風の吹くより秋とそよほるまの浦風

比良

比良 大はより六里北比良南比良の二村比良川あり初冬の比良神社と
まは高嶺に懸えたる系舟より鐘ふ足ゆる古跡多し比良

あまらるまの溪小駒とめくひく乃る根花をそよほ
楓咲むの山風吹き小花ありあり志うのうら波

さく波やゆくの島ひれ山麓紅葉と海のおとさく
花さそひひの山風吹きやうとたり舟のゆをゆるまく

さかみやまのうら傍風とくひのさねはま夜ふるく
雲そよひひの山風月と氷さめりまの浦あり

吹りそ山風とて波のひれ浅き子鳥啼く
氷ふそよこ水むむとつとはるのさねはま夜ふるく

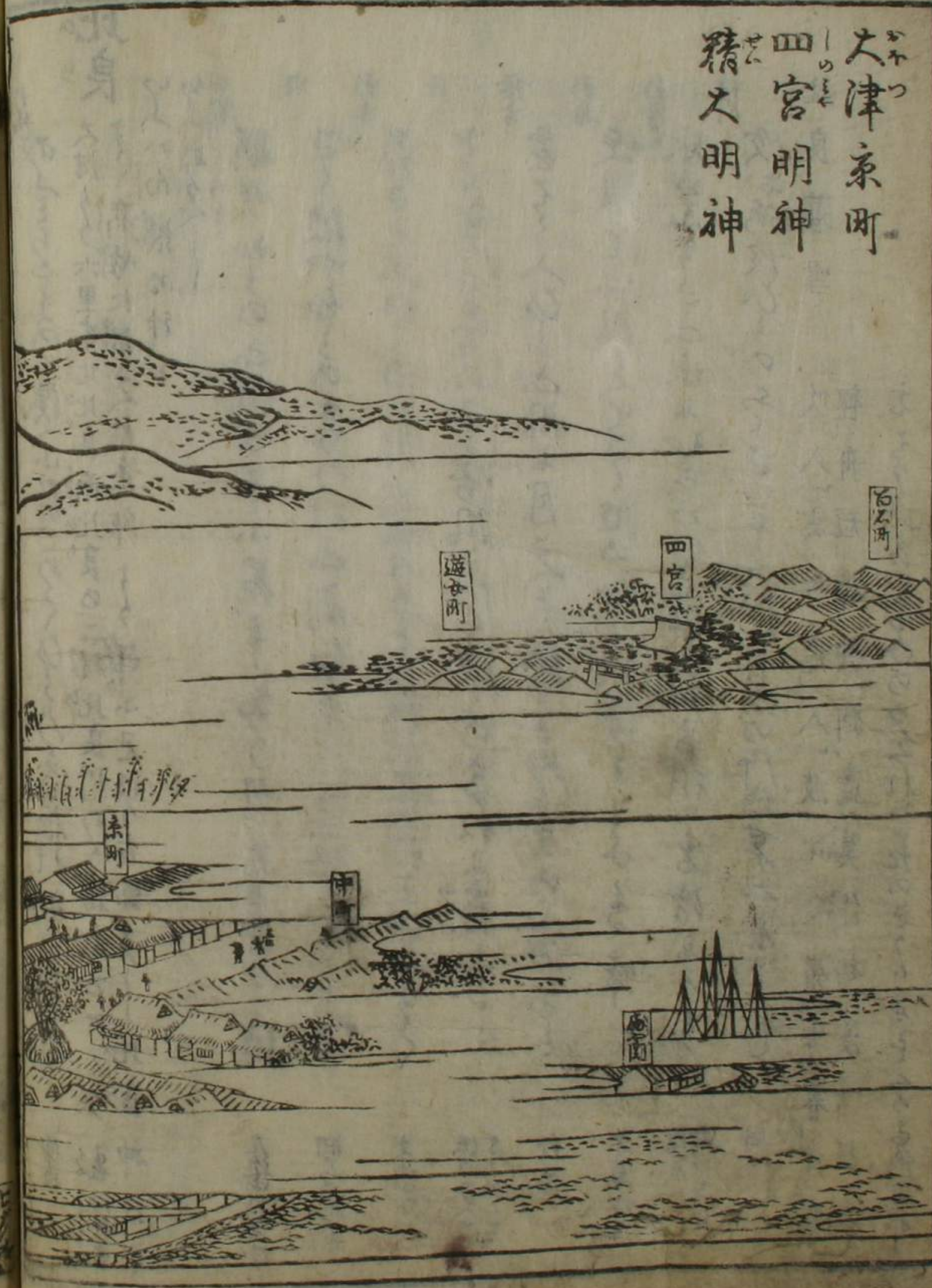
吹おろけゆく風のあきまをくれて日比の所掃せや春まらし
比良暮雪 吹入雲を飛入波比良嶺雪暮一様着

吹入雲を飛入波比良嶺雪暮一様着
軽舟短棹興何盡莫作抄溪一様着

若さう比良のさの夕なれは花のさうりまをさるる



大津系所
 四宮明神
 猪大明神



石名所

四宮

遊女所

系所

石名所

打出濱

系所よりを延坂み成越く初く湖中へ打出る濱瓜又りなり

今之松本の濱口よりありけり
上ノ畧
大伴黒主

後後拾
まはの海氷をくく白波の打出れ濱瓜其風ぞく

後後拾
大伴黒主

約多く打出の濱と見渡せし初日すくく志のうら波

後後拾
大伴黒主

白浪のうらちの濱れ秋亭ふ多にわたりし時をぞ啼

後後拾
大伴黒主

四宮大明神社

又津四宮町

系神 炎出見尊

地神す四宮ありて
在り地主神 大國主命 若狭

又坂本山王系なり社より
社と敵に毎祭二月下旬
申す日神主代衣冠して

社と大宮の社系も立ち
坂本の宮仕へりて
高解あく影射

半かき又元禄九年十一月
高社司人伴重堅古語拾遺
瓜板

社に

精大明神社

又津松本あり初ハ
社と敵に毎祭二月下旬
申す日神主代衣冠して

祭神

相殿仁徳天皇
社傳云高社精大明神ハ
神主代衣冠して

平賀と旧号あり相殿ハ
大鯨懸天皇と勸法尼末社
平賀大備宮

鎮火神 愛宕 恒世 神
あれハ池田家の祖神
みくく山王ハ神供瓜
瓜板

の生土神 例系四月朔日
年多天皇石止寺ハ
瓜板

新千載のきくら波の和舟
瓜板

打出濱のトみ出でし
瓜板

大掌會 縮穂貢
瓜板

松本渡口
瓜板

瓜板

瓜板

瓜板

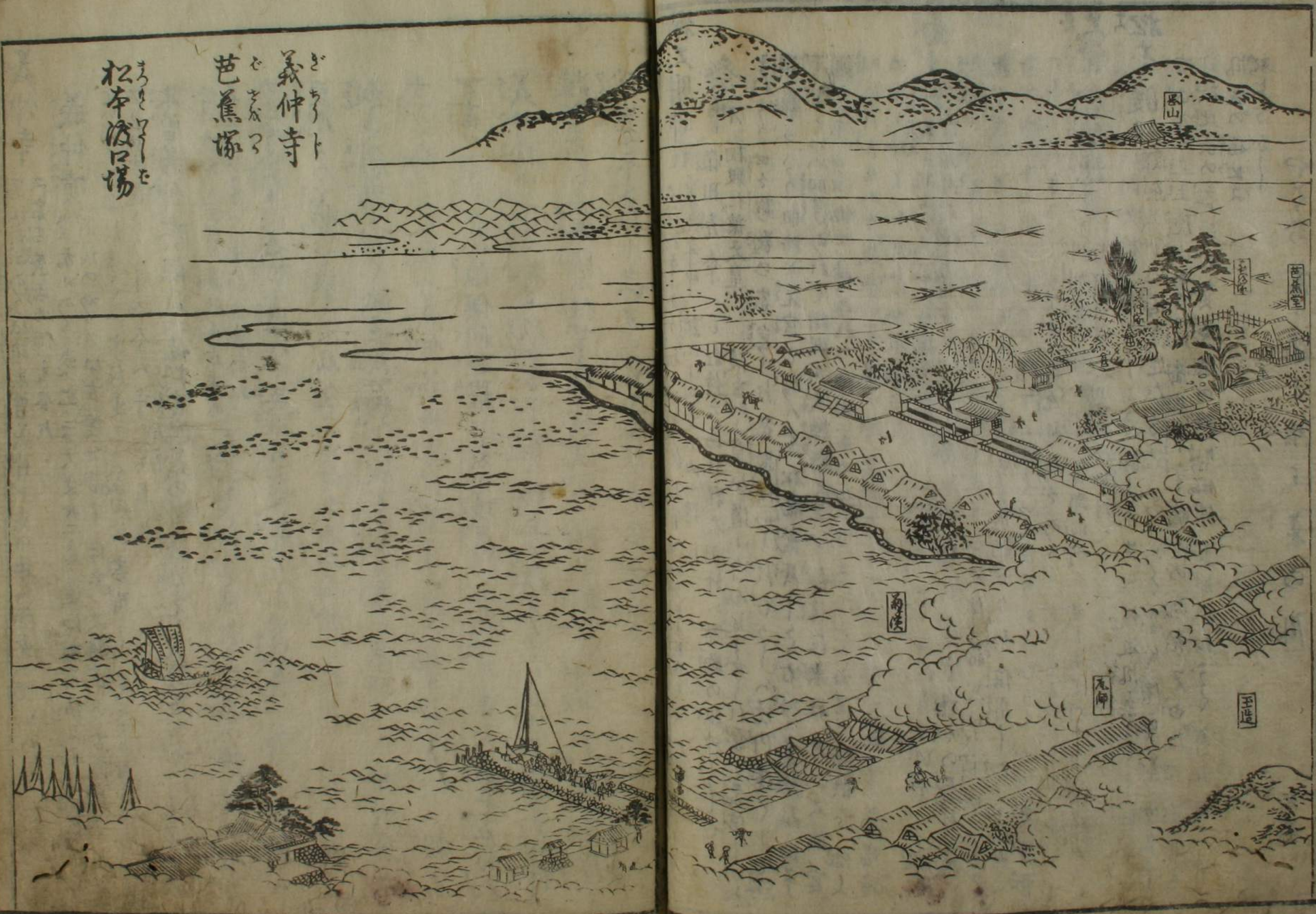
瓜板

瓜板

瓜板

瓜板

松本渡口場
義仲寺
芭蕉塚



義仲寺 馬場村ありは所本曾義仲親虎の地之佛堂小牌あり

義仲墳 堂者小あり或記云天文廿二年近江國司信長高頼石山寺

石山の末院より一寺今ハ寺門小屬也

本曾義仲姓ハ源氏六條判官爲義の孫常刀先生義賢の子

八月武州小放り悪源太義平の二業をく狐と成乳主の家小依て信州岐嶮

の中心小誓に長成小建んと英雄あ武死たり本曾冠者と號以頼朝ら

豆州より義兵を舉ふ小及んぞ義仲も亦兵を發し信州を平け上野

を討とく亡ひぬ 二業をく狐と成乳主の家小依て信州岐嶮

と書せり取れ砥浪俱利迦羅と名を攻落しつれ平軍死る者七万余人

義仲猶小少く都小攻定る平家ハ幼主と護りて西海小趨り義仲

權と名小左馬頭小任せられて執後國で賜り朝日將軍と名を承け

院宣を下されし一いやと後あはれしと驕奢日々小長ト公卿小廢官

土民と流毒し上皇と逐内裏に焚暴逆多うりしを鎌倉より

範頼義経討ちりて差せしれ宇治勢あてりて執ひりて義仲乃

軍敗し勢田と堅し兼小打出渡りしゆめ小疎去りて又執ひりて逐小

主從二騎小討ちりし粟津原の源小馬と未入後橋とと後小石田小太希

病小失小中く執死しり一平家小悟小ふり

芭蕉翁墳 義仲寺境内義仲翁小瀧り又昇室にそと瓜菰の本條と安次

枯尾花出辞世 病をゆえに枯尾花の春小春

西國の脚に 枯尾花の春小春

新五十一門人 其角又州正秀去來を初り十家并益の

近平實曆十年 の改系所下開跡五升唐檪及四方の難士小纏

空室の血脈 の堂内小蕉翁の行下二十六人の秀句を綴りて具

其角

志賀の志賀の御水

芭蕉堂の隣に無名亭と云ふあり蕉翁東山ゆきくの時此亭に止宿し
古跡あり推のよとそ流きふふりしに
古跡あり推のよとそ流きふふりしに
古跡あり推のよとそ流きふふりしに

大原や味のみく者入 脛月

赤米と綴のふけー 根芽汁

脛折

城あり木田彦領なり竹田門より五ヶ左あり城下の町都て廿四町人
西の口取町と云く宮ノ方町の右ハ八龍王の廟ありハの宮といふ
系ハ五月八日ハ龍神の社あり中ハ八龍神の社あり中ハ八龍神の社あり
陽炎清水台孫君とある田畑の祠あり中ハ八龍神の社あり中ハ八龍神の社あり
宮町ハ八龍神の社あり新羅明神の社あり又別保の村中ハ八龍神の社あり
棲みし一團分の住居ハ曲敷と云ふ門ハ五ヶ左あり

脛折ハ原粟津也脛折漢あり山王系小神供ハ献と云ふ由縁あり
脛折の七日の向い前の頭人の家ハ後ハ故社幕と張りしものあり

湖水交易の船着みかき征しと其為おん應と寶鏡と云く神供料
と云ふは十分一といひ起と原ふむい湖きふ二人乃総甲あり

名取江粟津佐森陽燄といふ今も人日吉江江佐粟津恒世と云く
ありしが鎌倉頼朝卿の台命より江に國干四立折ハのあ人の支配と云

九十九浦の初穂十か一辺に佐粟津恒世が支配といふ
按日名の社記小恒世が

又脛折ハ陽炎の法ありは前に居住せし、兼平の福曲に集はる衆や
谷ハ八龍神の社あり申の系日ハ縛船二艘ハ樓江志川

らハ粟飯の神供と銘記船中ハ英々發と云く夜の刻より湖上を漕出
若樂飯奏と云く城をめぐらる船の中ハ後ハ面江被と云く毛衣と着奉子

七人ありせれより磯つていふ大は漕り領主よりハ登園記も俱ハ
連と陸地往來の者又ハ旅人かど登と被かうと云くと觀まハ虚銃と云く

初ハ南年の刻ハ屋傍小到ハ神小後ハ神與と云くと脛折の神供ハ
あれより申の神の神式

神寄のトにスヘ

神寄のトにスヘ

神寄のトにスヘ

神寄のトにスヘ

神寄のトにスヘ

神寄のトにスヘ

粟津松原

主母のあしふ
つれづれに
松のあしは
みよか
近侍岡の時照公



粟津暗嵐
嵐屋粟津春興
長次霞吹雨似
相狂山花片々
一芦波湖上闊
鷗夢也香
相國寺林長光

本曾四天王
隨一之軍將
今并四郎兼正
栗津原血戰



春泉齋

陪膳濱

梨井の傍にありて... 梨井の傍にありて... 梨井の傍にありて...

栗津野

又栗津野は小野... 又栗津野は小野... 又栗津野は小野...

新千

栗津野の... 栗津野の... 栗津野の...

新千

栗津野の... 栗津野の... 栗津野の...

新千

栗津野の... 栗津野の... 栗津野の...

新千

栗津野の... 栗津野の... 栗津野の...

栗津杜

栗津杜は栗津野の... 栗津杜は栗津野の... 栗津杜は栗津野の...

新千

栗津杜の... 栗津杜の... 栗津杜の...

栗津里

栗津里は栗津野の... 栗津里は栗津野の... 栗津里は栗津野の...

新千

栗津里の... 栗津里の... 栗津里の...

兼平憤

兼平憤は... 兼平憤は... 兼平憤は...

東鑑曰

壽永三年正月廿九日蒲冠者範頼源九郎義經... 兼平憤は... 兼平憤は... 兼平憤は...

八五五

弑死の心を兼平王防弑の柳盡く太刀の切先と口小會と馬より運運小小隨隨くハ
自弑に禮記小曰人の臣とて其身を殺して忠臥忠臥死死は左傳左傳も忠を
人の望んとせ宋の文天祥文天祥も忠死忠死しく顔色顔色を愛せ韓成韓成の身身を殺し
て忠を厲む厲む遜遜も祠祠と帝帝もも建建るるも其忠死忠死と貴貴しく祠祠廟廟也
建建くく後世英名英名を賞賞せらるる年豈豈遺遺恨恨ありありと云

東海遺名折圖會卷之一 畢

